

中国の地名考察 I

藤 島 範 孝

①地名と符号

地名は一種の符号である。人間の社会的な生活体系が複雑化するにつれて、意志の表現を言語に依存し伝達することとなった。符号である地名は、口頭から漢字へ移り、漢字のいろいろな組合わせによって、人間社会の中へ特有な位置を占め、生活空間の一部となったとみられている。漢字はもともと象形、指事、会義、仮借、転注といった形象によって造成されたもので、言語を形成すると、共通の体系や普遍性をもつようになった。漢字以前に誕生した口頭地名も、その言語体系の中に含まれ、他の要素と結合したりして、より符号性が強調されるようになった。中国の地名というと、先ず漢字ありきというように、漢字が先行し漢語の地名を造りあげてきたと錯覚さえすることがある。しかし、地名の発祥は目印としての符号から発展したものとみると、漢字以前の符号もあった。

勿論、新しい開拓地、屯田開拓が拡がると、漢字による新しい地名が命名されるのが常である。又、自然的災害などにより荒蕪地と化した野原、山岳、丘陵、台地などに新しい計画的村落或いは都市を建設しようとする、新地名が命名されるのも常である。

例えば、地震災害を受けた唐山市は、その後都市を再興し、省の直轄市として五区十県に区分けし、新地名を命名した。かつて、老市区と通称していた区を路北区と路南区に分け、老市の東部を東砒区、老市の北部を新区とし、新規開発しようとする地区を開平区にしている。

主要街道も東西走行を「道」とし、南北走向を「路」と呼称するようになっている。東西走向道は、南新道、国防道、新華道、西山道、北新道とし、南北走向路を缸窯路、河東路、河西路、唐農路、文化路とした、住居区も「楼」と「里」を街区区分に入れている。

震災を受ける以前は、居住区も官舎も、工商業区も自然発生的に、任意の無計画都市を形成していた。街道も地形に沿い湾曲していた。だからといって、震災後全ての地名を改新した訳ではない。史的な名称や所謂生活地名という小地域地名の殆んどが、旧名である通称を残している。特に街道の脇道路、街巷名は旧称である。旧住区も、この地方は古くから「楼」による地区区分習慣があるので、東砒区に模範楼、路北区に曙光楼、家強楼などが地名として残っている。

地名は震災や戦乱や廃村などの史的篩いにかけて残るものがある。それは地名が符号で、生活に利便性のあるものが残るといいようであろう。地名は符号であり地表空間の特定包囲の概活標式であるとする、言語的符号とは区別しなければならぬと思われる。しかし、地名は一般に符号であると同時に言語的発義から成立していると考えられている。

②地名の簡略化

言語そのものが、人間生活の客観的事物や現象の反映であるから、一般的には普遍的な物質名称と、複雑な言語表現をとる名称と、出来るだけ短縮し簡単化し簡略化をとる名称に区分される。簡略化がすすめば、或る場合は地名は符号としての扱いを受けることになる。

中国の行政区画は、大区分として国家直轄市と省と自治区に区分されている。各れにも簡略称があり「簡稱」といっている。北京市は「京」、天津市は「津」、上海市は「滬」である。以下省と自治区の簡稱を掲げてみると、次の如くとなる。

河北省が「冀」。山西省が「晋」。内蒙古自治区が「蒙」である。遼寧省が「遼」。吉林省が「吉」。黒竜江省が「黒」。江蘇省が「蘇」。浙江省が「浙」。安徽省が「皖」。福建省が「閩」。江西省が「贛」。山東省が「魯」。河南省が「豫」。湖北省が「鄂」。湖南省が「湘」。広東省が「粵」或は「越」。広西壮族自治区は「桂」。海南省が「瓊」。四川省が「川」或は「蜀」。貴州省が「黔」或は「貴」。雲南省が「滇」或は「雲」。西蔵自治区が「蔵」。陝西省が「陝」或は「秦」。甘肅省が「甘」或は「隴」。青海省が「青」。寧夏回族自治区が「寧」。新疆維吾爾自治区が「新」。台湾省が「台」である。

省名の簡略化には、省名そのものを簡略したものと、古名、古い国名、地域名が簡略として用いられている。古名は各れも一字で表現されている。古名即簡略といわれるのは後代のことで、かつては古名が地方名、国名であった時代もある。

漢語の場合は双音節の地名を常道とする。いくつも音が重なるものは、呼称として簡略化する傾向がある。西直門外を「西外」といったり、内蒙古自治区を「蒙」の他に「内蒙」といったりする。江蘇省などでは複雑で、「江蘇省の長江以南」を「蘇南」と略し、通称を「江南」という。同じように「江蘇省の長江以北」を「蘇北」と略し、通称を「江北」という。江蘇省と安徽省を貫流する淮河を夾む広大な沖積平野を「両淮」といったりする。この「両」は2つの省を指している。

簡略化の傾向は各市各県にも及び、それを簡名ともいっている。江蘇省も江蘇省蘇州市の簡名は各れも「蘇」である。南京市は「寧」。無錫市と無錫県は「錫」という。徐州市は「徐」といい、常州市は「常」、常熟市は「虞」といい、南通市と南通県は「通」といい、連雲港市は「連」、淮陰市と淮陰県は「淮」といい、塩城市は「塩」、揚州市は「揚」、鎮江市は「鎮」という。各れも江蘇省内の市と県を例にとったが、各省の各市各県に簡名がある。厄介なのは「寧」のように寧夏回族

自治区と南京市の如く同名の簡名があったりする。漢字一語による地名の簡略化はややもすると同表現になることもあるが、一般には間違っても用いられることはない。

③中国地名と別名

黒竜江の右岸、中国最北端の地に「漠河」という鎮がある。「漠河」の「漠」は満(州)語の「墨」で黒色を意味する。「黒い河」が語源であるとされている。しかし、黒竜江の湾曲に立地する集落であり、流下する河なので、古北方語(ツングース語系)でいう「磨く」(漠と同音)河の説もある。河を磨(みが)くとは、河岸を浸食して流れることをいう。周辺は泥炭地帯で、融水期には河岸が崩れることもある。語源が明確でないこともあって、この鎮名には別名が多い。

中国領域の最北端に位置するので「北極鎮」、「北極村」、「北極城」。冬季は夜間の長いこともあって「黑夜」、「長夜城」と呼称する。極北でオーロラ現象もあるといい「極光城」の別名がある。大陸性気候で内陸にあって寒さが厳しいので、「寒極」とか、「寒杣城」ともいわれている。漠河の支流の一つである老溝河の河川敷から砂金が採れて、一時ゴールドラッシュに湧いたことがある。その時の名残りで「黄金之路」とか、「三站」「十三站」「三十站」という黄金(砂金)運搬路沿いの駅通名が地名となったものである。又、「黄金郷」「黄金城」いう別名もある。地理的歴史的特徴が別名となって残る。別名を知るだけで古老として扱われるともいう。各れも漠河の別名として今も用いられている。

これとは別に古称を別名として扱ったり、又の名を別名と呼称することもある。殊に古蹟のある地方の別名は厄介である。

湖南省の東北部、洞庭湖に面して、「岳陽」という都市がある。太岳(たいがく)の南にあるので岳陽といわれたが、もともと古代の麋子(めいし)国、漢の下雋(すい)の地である。又の名を「岳州」或は

「純州」という。古称を「巴陵」(はりょう) 或は「巴丘」, 「巴邱」という。晋の太康元年(280) 巴陵県を用いる。1914年武陵道に改めている。ただ、この古称別名の巴陵についての語源については諸説があり、未だに定説がない。

地名としての「巴」(は) は重慶市付近を指している。もともと舟の艚に描いた模様で、水が沸(わ)いて外へ旋(めぐ)る象(かたち)をとり合わせたものといわれる。水の形を表現するといわれ「巴瓦」(ともえがわら)に用いられ、火除けの呪(まじない)になったという。

巴陵の地名語源について、代表的な4つの説がある。一つは唐初の李吉甫の「元和郡県志」にある「洞庭に羿屠巴蛇なる者がいて、骨を若陵に埋めた」ので、地名を巴陵にしたと謂っている。清の馬征麟は「長江図説」で、「巴陵は山海経や淮南子にある如く、羿屠巴蛇をとる」と謂い。孫呉時は邸宅を巴邱においたが、この地古く東陵とあったので、巴蛇の巴と、東陵の陵を併せて巴陵と称したと謂っている。同じ清代の杜貴墀の「巴陵県志」では、山海経のいう「羿屠巴蛇」なる者は、夏以後の羿系東夷の首領名である。黄河の中・下流及び淮河の河域に出没しているが、洞庭湖のある長江流域には入っていない。従って、巴陵の語源となることがなかったとしている。

「羿屠巴蛇」なる者は夷族の首領のようであるが、そもそも「巴蛇」とは大蛇のことである。推測するところ、大蛇を崇拜し巴蛇と称した異族が、洞庭の陵(おか)の上に集落を形成していたのではないかと考えたりしている。この語源を神話説と名付けている。巴とは蛇のとぐろとも考えたという。

二つめは巴峽説と謂い、「隆慶岳州府志」にあって、巴陵とは「邕地と巴峽は、東西に相望む」とある。邕地と巴峽の見える地点を指した地名であるという。この説有力とみる地名学者は多い。地名に巴を用いるのは「巴安」(旧西康省の県名)、「巴江」(四川省南江県より源出し、南

流して嘉陵江へ入る河川名),「巴東」(湖北省の県名,漢朝の郡名,今日の四川省雲陽奉節などの県に跨る),「巴嶺」(巴山ともいうが,別名大巴山といい,陝西省西郷県の西南にある)。「巴県」(四川省の県名),「巴里坤」(新疆維吾爾自治区の鎮西県にある湖名。)そして,「巴峽」である。「巴峽」は長江から巫山を経て湖北省の巴東県へ至る峽谷の地方名である。

三つめは巴族説である。何光学の「岳陽市地名考」に,「戦国の後期巴族が,楚軍に追撃を受け四散し,その一部は東へ移動し,湘西,黔北及び鄂西方面へ逃れた。更に楚軍の攻撃を受け巴族は次々に殺害され,この地に巴族の墓を残したという。この墓地を今も「巴丘」と呼んでいる。又,「十道志」には「楚子に據って壊滅させられる。巴子兄弟五人が黔中へ移動」とある。この一文は古代史から欠落しているというが,凶騰標式はもともと巴人が用い,巴蛇の骨も巴族の墓地に残っているとされる。「楚国民族述略」の中でも,長江の中流,西湖盆地一帯では古くから「巴」の字を用いる地名,山名,水名が多い。巴族が集中し,この地方が拠点であったからといわれている。

四つめは人名説である。南宋の王象之の「輿地紀勝」では,劉巴なる人物名がでてくる。字名を子初といい,零陵蒸陽の出身で,地方では名が知られていた。諸葛亮に仕え,のち尚書令となっている。章武2年(222)荆州を出て岳陽で逝去し,郡の西方に葬られる。この巴墓を巴陵と称したといわれる。光緒年間の「巴陵県志」や「華陽国志」には「蜀先生が執筆する時,巴作と書いた。逝去して岳陽に葬らる。」その号に因んで墓地を巴陵としたと伝えられている。岳陽の別名である巴陵については今も論争が続いている。最近では何林福,李翠娥による「岳陽古称巴陵考」に詳しい経緯が論述されている。

④中国地名の雅名と転称

岳陽の別名「巴陵」は、「巴邱」或は「巴丘」の転写であり、転称といふべきでないかという説もある。「水経注」では次の如くいっている。「巴陵は、呉の巴邱にある邱閣」を指している。巴邱の名称は三国志、呉史、周瑜伝などに早くから見えている。「曹公が荊州へ下る。先生の舟師を追って巴邱へ至る」とあり、「瑜では装（よそおい）をととのえて更に江陵へ向うが、巴邱に至って病いにより死ぬ」とある。又、「陵」líng も「邱」qiū も各れも墓場の意味としては共通する。

東漢建安19年(214)孫権が魯肅鎮を巴邱へ派遣し、次年には巴邱城を増築している。これらの例から「巴陵」は「巴邱」の転称と知れる。明代に至って「巴邱」と「巴陵」を混用したものとも推測できる。「巴邱」は又「巴丘」と簡略されたものとも見れる。

簡略化された「巴丘」には別な意味が含まれているのではないかと、従来から議論されている。「正韻」では「巴」は虫のことをい謂う。或は「食象蛇」を指すとある。「丘」とは「阜」のことで、高い処をいい、四方が高く、中央が低い盆地の如き地形をいうとあり、「博雅」でも小陵を「丘」と謂う。「爾雅，釋丘」では「丘は人に非ず」とある。

しかし、明代以降「巴丘」の語源は神説伝説にありと「讀史方輿紀要」などで説かれた。「巴邱山は、又の名を天岳山と謂い、別名を幕阜山という。培樓が建てられてから巴陵山といい、蛇塚でもあるという。

「羿屠巴蛇」が洞庭にいて、若陵に埋められたので、巴陵山と謂うのである。長江に面している」といっている。

道光の「洞庭湖志」に據ると「巴邱山とは郡城を置いた地、又の名を巴蛇塚」とある。「明一統志」では「巴邱山は岳州府城南にある巴蛇の塚を指す」とある。「隆慶岳州府志」には「巴邱山は郡の東南に位置している」とある。「爾雅翼」では「岳陽郡の傍にあつて、高い処があり、竹など繁茂していて、昼なお暗く、人は巴蛇の骨が埋められている

処という。城外に巴蛇廟があったが、今は廢されている」とある。「隆慶岳州府志」では、巴蛇井戸があったという。「巴蛇井戸は巴陵県の県城前にあり、古くは巴蛇が、この穴から出入していた」とある。

「大清一統志」には、「巴蛇井戸は県南にあり、羿が巴蛇を斬った地である」と謂い、すぐ近くには象骨港や象骨山があるといっている。長江岸の象骨山は今は臨湘県に属し「円丘」といっている。黄本驥の「三長物齋長説」に據ると「巴陵に象骨山、象骨港がある。伝説によると巴蛇が象を呑んで、その骨をここにおいた。後に山名と港（支流）名になって残った」としている。これらから「陵」は当然地形的特徴を指しているものともとれる。

「爾雅・釋丘」の考えからいうと「後方が高い丘を陵」とある。「大阜のものを陵丘と呼ぶ」といっている。明の葉世杰は「巴陵の名は巴丘といい、丘の大規模なものが陵である」といっている。各れも墳墓、陵墓と関係があるとしている。もともと「丘壘」は墳墓を指し、「陵」は貴人の墳墓である。その墓守りを「陵戸」といい、古帝主の墓を「陵園」という。「国語・斎語注」は「陵の終りは、葬なり」としている。

今日の岳陽市の地形は、市区内は丘陵が多く起伏が激しい。部分的にも各所に凸凹のある地形である。「丘」や「陵」或は「阜」が用いられる地形に集落が立地している。「巴」は蛇の象形文字である処をみると、丘上に蛇がいてもおかしくないし、巴塚として理解できるような気がする。そして又岳陽は、そうした古い因縁を持っている都市であるという意味を齎めて「巴陵」と言い換えたりする。これが雅名である。風土と文化を知ることによって、別名が生き続ける。それが雅名である。のちに生活情感が湧かないということで、再び旧名に改め雅名を現代名として用いる例もある。

⑤中国地名は神に従う

「巴陵」は岳陽の雅名として扱われているが、更に由来を追求してみると、漢字そのものを解釈するものと、既述した如く、岳陽はもともと神話の故郷とし「巴蛇が象を呑んだ」伝説の地で、この地の山や丘は、巴蛇が象を呑んで吐いた骨が堆積したものであるといい。伝説地名を強調し「巴丘」「巴陵」は単なる地形の特徴を表らわしたものではないというのである。その意味では「牛渚」や「馬牛」「馬閣」などと同じような意味あいの地名である。「牛渚」は安徽省の当塗県の西北二十里にある山名。古く守備地として用いられ要塞が残る。「馬平」は広西壮族自治区にある旧県名、「馬江」は馬瀆江、又の名を馬頭江、俗に馬尾とっている。風江にて福州に近く近鼓山の下を東流している。巨石があつて馬頭の如しという。潮が引くと石が露出する。軍港として用いられた。「馬閣」は四川省の平武県の東南にある地名。

唐代の張説在の「巴丘春作」の詩文の中で「湖陽に魍魎がうかがう。丘の形巴蛇の如し」とある。岳陽の集落は一匹の大蟒蛇に囲まれているようである。この蟒蛇は周辺の山系を指したものである。「巴陵凶騰」を見た人びとは山や丘は「巴蛇の骨」の堆積したものであるという、各れにしても地名は神命に従うといわれ今日では人知で判断できぬものも多い。「巴蛇」には骨がないので、象を食して山積みにしたなど、これ又地名としては神の判断を仰ぐ必要がありそうである。

⑥中国地名の読み方

地名には独特な地名特有の読み方がある。蒙古語や維語爾語、蔵語、満語、壮語、納西語(東巴文字)、彝語、傣語、苗語などの少数民族の地名は、漢語に転写したものが多く読み方発音が異なる。ここでは少数民族の漢字表現で別意をもつものを除いて、漢語であり乍ら異読される地名について、いくつかの例を掲げて見る。地名が異読されるには一般

に3つのパターンがある。

その第1は多音字(熟語)の異読である。漢字で表現されると、気をつかぬまま読んでしまうことが多い。単に方言的読み方発音で片づけられぬものを例をあげてみる。

河北省大城県の「大」は普通語(北京語)で dà と dài の発音となり、この地は dài ととる。山東省の東阿県の「阿」は ā と ē の両音があるが、この地では ē をとる。陝西省の吳堡県の「堡」は bù と pù と bào の発音がある。所謂地名用語としての「堡」は pù。この地では bù と発音する。

「行」は, háng と xíng と héng の読み方があるが, 上海市閔行区では, háng としている。広東省澄海県や海南省澄邁県, 雲南省澄江県の「澄」は, chéng と chén と dēng の各れかに読むが, この例の各れの県も chéng と発音されている。この種の地名の発音には慣習が先行し, 音韻法的な規定がないだけに厄介である。同時に, 小地域或は限定地区の慣用なので, 特殊な発音による共同体意識が底流にあって, 排他的な慣習が慣性となっていたりする。広い意味の広東語は実際は更に七地区, 八地区に語音が区分されていて, より郷土意識が強調されたりしている。特に郷鎮の村落名には, こうした傾向が顕著である。

河南省の中牟県や雲南省の牟定県の「牟」は móu と発音するが, 山東省の牟平県の「牟」は mù と発音する。河南省の滎陽県の「滎」は xíng と発音し, 四川省滎經県の「滎」は yíng と読む。浙江省の樂清県の「樂」は yuè といい, 四川省の樂山県や江西省の樂平県の「樂」は lè と発音する。山西省の長子県の「長」は zhǎng と読み, 吉林省の長春市, 遼寧省の長海県, 山東省の長東県などの「長」は cháng と読んでいる。河南省尉氏県の「尉」は wèi と読み, 新疆維吾爾自治区の尉犁県の「尉」は yú と読んでいる。

こうした地名特有の発音はややもすると当地人と異民族の言語摩擦を

中国の地名考察 I (藤島)

おこすことも少くない。地名によっては古音が混入していたり、方言との関連であったりして語源の不確なものも多い。

次に市県級内の規模で、特殊な発音をする集落の一部を列記してみる。

地名 (省の简称)		特殊読み	一般読み
蔚 県 (冀)	「蔚」	yù	wèi
樂亭県 (冀)	「樂」	lào	lè·yuè
獲鹿県 (冀)	「獲」	hài	huò
浚 県 (豫)	「浚」	xùn	jùn
泌陽県 (豫)	「泌」	bì	mì

(旧くは秘 mī が bì ととも発音された)

洪洞県 (晋)	「洞」	tòng	dòng
繁峙県 (晋)	「峙」	shì	zhì
穆峙県 (黒)	「峙」	lǐng	lēng·léng
柞水県 (陝)	「柞」	zhà	zuò
宝坻県 (津)	「坻」	dǐ	chí
黄陂県 (鄂)	「陂」	pí	bèi·pō
樅陽県 (皖)	「樅」	zōng	cōng·cóng
渦陽県 (皖)	「渦」	gūo	wō
蛙埠県 (皖)	「蛙」	bèng	bàng

(安徽省の市名、県名 Bèngbù といい、この地のみ)

歙 県 (皖)	「歙」	shè	xī
六安市 (皖)	「六」	lù	liù

(安徽省の山名と茶名にも用いる Lù'ān)

六合県 (蘇)	「六」	lù	liù
鉛山県 (贛)	「鉛」	yān	qiān
厦門市 (閩)	「厦」	xià	shà
番禺県 (粵)	「番」	pān	fān

東莞市 (粵)	「莞」	guān	wǎn
百色市 (桂)	「百」	bǎi	bǎi
(広西壮族自治区の市名のみ Bóse)			
筠連県 (川)	「筠」	jūn	yún
犍為県 (川)	「犍」	qián	jiān
莎車県 (新)	「莎」	shā	suō
通什市 (瓊)	「什」	zá	shí·shén
漾濞自治県 (滇)	「濞」	pí	bì
澎湖県 (台)	「澎」	péng	pēng
閩侯県 (閩)	「侯」	hòu	hóu
華 県 (陝)	「華」	huà	huá
華陽県 (陝)	「華」	huà	huá

この他山東省の済南市や河南省の済源県の「済」は jì と発音し、一般的な jì の読み方をしない。地名には四声の一般的な慣習を無視して発音されるものが少なくない。陳根良の「浅析我国地名的读音」に據ると、地名漢字の前にあった古語の影響が強いものと指摘している。

⑦中国地名専用字

地名専用文字がある。古国名や姓名が多いが、今日一般的な漢字として用いられてないものが地名として残っている。1964年の国务院の調査によると、ともかく35の特殊地名を改めよとしている。主なものを掲げてみる。青海省豊源回族自治区→門源回族自治区と改める。陝西省整屋県→周至県と改める。鄜県→富県。鄜県→戸県と改める。新疆の婁羌県→若羌県とし、四川省の鄜都県→豊都県。広西壮族自治区の鬱林県→玉林県と改名した。しかし、依然、地名専用字が地方には残っている。これも主なものを列記してみる。

胸 (qu), 沐 (shu), 鄜 (ling), 汨 (mi), 邯 (han), 鄆 (dan), 郟

(pi), 郟 (tan), 鄆 (shan), 嵯 (sheng), 郟 (jia), 鄆 (yan), 亳 (bo), 鄆 (yan), 鄆 (juan), 鄆 (yin), 瀆 (lang), 嶗 (lao), 涑 (lai), 嵯 (lai), 澧 (li), 瀘 (lu), 淇 (qi), 淮 (sui), 潁 (ying), 郟 (yun), 洛 (luo), 濮 (pu), 鄆 (yun), 灑 (chan), 郴 (chen), 荏 (chi), 滌 (chu), 溧 (li), 邗 (can), 荷 (he), 岢 (ke), 溧 (luo) などがある。又、一般的用語として用いるが、地名に用いる時には特殊な意味を齎めるものもある。安徽省黟県の「黟」は yi と読むが、もとは黒色、黒い顔のことをいった。河南省の黟県、江蘇省の睢寧県の「睢」(sui) は、もとの意味は相手の顔を下から上へ見上げることをつたえた。湖北省の秭歸県の「秭」(zi) は数の単位で1万億のことである。河北省藁城県の「藁」(gao) は多年草の植物名であった。青海省湟中県や湟源県の「湟」(huang) は、低地に水が溜り浅い沼ができることをいっている。地名として用いられると特殊用語となってしまう。

更に厄介なのは方言とか土俗語とかいわれる小地方の言語が、地方特有の発音とともに登場すると、一般には解釈ができないことが多い。時には地方造字として扱うものがある。主なものに「埭」(dai)。方言では「壩」いわゆる堤である。「沱」(kuang) 方言では洼池、沼である。「砬」(la) 方言では大石塊、岩山をいう。「蓄」(tan) は池塘、沼である。「畎」(fan) は方言で田圃、耕地である。「堡」(fa) は方言で耕作された土地をいう。「澗」(jiao) は方言で、支流、合流、落合をいう。この種の造字は大区分には用いられないが、少数民族の動向、村落の源流、史地的変遷などには欠かせぬ研究材料となっている。

⑧中国の郷鎮地名

小地域の地名のことに觸れたので、「村」の地名について考えてみたい。人びとが集まって居住する空間を村といった。村の範囲は初めから限定されていなかったもので、村の中に小さな集落をつくと、それも「屯」

(むら) といった。河南省には「屯」の中に「小屯」がある。一般的に「村」は農耕民、「屯」は遊牧民に用いられる傾向があつた。広西では後に入植した移民が村の中へ「屯」をおいた。屯田兵入植の意味もあつたものと知れる。更に集落が大きくなると「庄」「寨」「舗」「堡」というのも村名として用いられる。稠密度合にもよるが「集」や「坊」も村と同義として扱われる。

村は「邨」とも書くが、城外の人家の集りから始まり、地方行政体の最小単位となる。なお、最下位単位には更に自然村があつた。一般には洗煉された「都」(城内)と対比されて、野卑で下卑な「村話」される。村とは広義の農山村を指し、狭義の小集団は村の字を用いないようにしている。村人は田舎者という意識は今も強い。農戸籍から都市籍へ移籍しようという努力は歴史の底流ともいわれる。

先に述べた如く「村」に「屯」(とん・tūn)を用いる処がある。屯名の付く村は時代によって異なるが、おおむね三区分できる。1つは「駐屯」地の「屯」で、陣営から村へ転化したもの、2つは「屯田兵村」が「屯」になったもの、3つめは移住した土地へ新しい屯をつくって、既成の村の中へ定着したものがあつた。陣営から「屯」になったのは黄河の河域、殊に上流に多い。駐屯兵が定着したものもある。撤去して後も地名が残ったところがある。河南省の「小屯」(xiǎo tún)地名が各地に散在するが、「大屯」はない。「屯子」(tūnzǐ)地名は運命共同体を意味するようである。但し「屯」を(ちゅう・zhūn)と発音すると地名ではない。屯田兵は古い制度であるが、軍屯、民屯、商屯の区別があつたので、屯だけでは明瞭でないものがある。東北地方では「村」より「屯」の方が残り「村屯」が、村の総称であるとされた。

清の咸豊に入って、山東省の徳州で「村」を廃し、全て「屯」に改め110の屯をつくっている。高唐で77屯、肥城では1溜18屯に改名している。また、南下政策の不断の続行で、広西の山岳地へ移民が流入し、流

入集団が「屯」を持込んだ。

村の総称として用いる屯は東北地方にも多いといったが、遊牧民特に蒙古族の集落に用いられている。遼寧の阜新市に属する阜新蒙古自治県でみると、この行政区画は32郷と4つの鎮と国営農場と国営種畜場が各1つと、7つの林業場と2つの国営苗圃と57の村と、1878の自然屯から構成されている。この地は古く「蒙古貞」といわれ「東蔵」の地とされた処である。

自然の「屯」は北方民族蒙古族は遊牧の民であるから季節で草原を移動した「包」集落の名残である。1878屯全てが蒙古族ではない。蒙古族の屯は1021屯で、総数の54%を占めているにすぎない。残りの多くは漢族の屯なのである。

蒙古族の地名は地形の特徴などの自然環境が屯名となることが多い。沓馬屯（古くは烏他特音艾里といった。）は煙の昇る処の意である。伝説によると山頂の火口湖の側から噴煙が出ていたといわれる。遊牧民にとっては冬季の草のある処へ屯をつくるのが常で、この村の胡字溝（古くは臥伯勤津皋）といっている。また、羊飼いや牧羊人の村は馱馬池（古くは雅嗎阿赤）といい、牧牛人のみの村を馬爾浸（古くは嗎勒沁）といっている。豚飼いの圉のある村は生海西北（古く生海音西伯）といっている。発音は各れも蒙古語から出ている。牧舎のあった処は三字子（古く必勒東仁各日）といい、「屯」と考えられている。

「庄」（しょう）も村である。かつては「莊」と書いた。発音は（ほう・はう）。莊の俗字で（しょう・zhuāng）ともいった。「莊」は（しょう・しょう・zhuāng）といった。莊園というと別莊をいい、のちに朝廷から皇子諸臣に賜った地方の土地を私有化してしまっただが、官莊、皇莊の地名が残った。唐以降は均田制がこわれると、寺院や豪商が莊園を造った。莊で働くことを「莊稼」といった。

地方官僚が百姓を募集し、荒蕪地を開墾して、「新莊」を造成した。

「設荘召民租田」とした。「官佃民」とか「客戸」「荘戸」といわれた百姓が、荘園の私物となり、名称だけは「官荘」という500畝単位の「荘」(むら)が次々に生れた。私属させられた百姓を「内宅荘使」という。水滸伝にある祝家庄李家庄、扈家庄などは、祝一族の村、李一族の村のことである。各れも荘園主の姓が庄の名となった。姓氏庄名という。北宋までこの傾向が続き「官庄」という名の「私庄」が国土を分割した。

「寨」(さい・zhài)も村である。寨は砦(とりで)の意味がある。同音の「塞」(さい)を用いることもある。万里の長城の北側を「塞外」という。土で固めた砦を「塞」といった。長城は石でも固めたが、処によっては土を積上げた堤になっている。しかし、一般の村の防柵は木製か土塀であった。樹木の柵が多い村囲いの村を「寨」といったのである。柵の内側に兵が駐宅した「安營扎寨」という。寨の中に兵營があった。山中に籠(こも)って寨をつくれば、山賊の村となり「山寨」といわれる。侵入する倭寇防衛の砦を海辺へつくと「浜寨」といった。江蘇の沿海には地名として残っている。「寨」は防禦壁に囲まれた荘園でもあった。寨主が地主で一族を率いた。山蔭の小さな砦をもつ荘園は「塢」(う・Wū)といわれ、煉瓦の壁で囲むと「壁」(bì)陣營ともいう。地主が村主なので「塢主」(うしゅう)「宗主」(そうしゅう)「寨主」(さいしゅう)といい、時には首領でもあった。宋代へ入ると、地政的に重要と思われる処へ「防衛所」をおき「寨」といわせた。「要寨」という。豪族地主も真似して百姓を寨の外へ出し「寨外民」とし、寨の中へは「寨客」を招き、「案内人」を武装させ武士団をつくった。築上して七寨とか安平寨とかいう地名が残っている。のち柵がこわれて実際の壁が消失したにもかかわらず寨名が地名として残ることもある。

村名の末尾に「舗」(ほ・pù)のつく処がある。古くは「鋪」(ほ)と書いた。蓆や石を敷くことに用いた。舗道と今もいっている。もっと

古くは店舗のことで「老舗」(しにせ) といった。宿場の宿泊所にも用いた。地名用語の「堡」と同じように用いられ「五里舗」「十里舗」という処を「五里堡」「十里堡」とも用いた。元代に駅遞を儲け每十里、十五里、二十五里に「一舗」をおいた。「舗」には五人の「舗丁」がいて、馬継ぎの便をはかった。やがて駅遞が中心となって村ができたか、地名として残った。「堡」はもともと土で築いた丘、小さな城、小さな砦をいい、見張台をおいた処もある。元代につくられたものが多い。一定の距離で「堡」おき、駅遞であった。古い時代の「舗」と同義で、同地点に設けられたこともあった。清末には郵便局事務を「舗」の名称で設置したこともあったが、のち「駅站」(えきたん) と名称が改められた。

「集」(しゅう・jí) という名称の村もある。「集大成」などというから、村より規模が大きくならぬ気もするか、実際は「集・日」という市(いち) の立つ日が決まっていて、そこへ人が集ってきて「集市」になるから、特に規模とは関係ない。定期的交易市のできる村に付いた地名である。定期交易市は南京城外の草原から始ったので、「草市」といったといわれる。華南では「墟」(xū) 市、「圩」(xū) 市、「坊場」「集市」などといった。家畜を扱う市は、「馬市」「牛市」と区別した。織物や糸を扱うと「糸市」「綿市」といった。村の東側に市ができると「東市」、西側に成立すると「西市」といった。夜だけ店を開くと「夜市」という。「市」は fú と発音すると古字の「鞮」(fú) を意味し、祭祀の時にしめる帯のこともいうが、一般的には交易場として用いる。一時度量衡の単位として用いられたりした。行政区画ができてから、自然発生的「集」集落と異なって、人を集合させ計画的に集中させる「市」(し) が生れていくようになったと思われる。

「坊」を語尾に用いる村がある。「坊」とは市・街・村の通称であるが、一旦街巷へ入ると小路、横丁、露路、路地をいう。ただ、通路そのものでなく面としての広がりて扱う。入口に石牌坊を建てて、「忠孝

の坊」「貞節の坊」「考悌の坊」「百才の坊」といったりする。唐代の土地区画であった「坊制」を名残りとし、村の生活の場に「油坊」「酒坊」という地名をつけた。「村坊」というと「村里」と訳している。坊の中で織物、鑄物工場などといった郷鎮企業が村に発展することもあった。

⑨類似・類語の地名

1951年2月より中央人民政府政務院公布により、地名の整理と変更が行われた。しかし、漢字の字型の似たものや、転換語、反語、同音、近音、調和音など混同しやすい地名、錯誤しやすい地名が多く残っていて、地名の合理化は中国文化の発展につながるとはいうものの、実際は近域の近代化の障害になっているものと考えた。一方歴史的な伝統地名について、単に他に類似があるからといって改正或いは破棄できないという地域的な抵抗もあって一朝一夕に解決できないでいるのも実情であった。ここでは和語との関係も併記し乍ら、県級の地名を中心に問題と思われる地名を列記してみる。和語で中国地名を読む時には、古くからの慣習音を尊重し、和語にないものは漢語音に近いものを採用してみる。

- ①「兴山」と「光山」(兴の旧字興)字型が似ている。(こうざん)。「興山」(xingshan, 湖北省の県名)「光山」(Hengshan, 河南省の県名)
- ②「衡山」(こうざん)・Hengshan, 湖南省の県名③「衡山」(こうざん・Heng-Shan, 湖南省の山名, 別名南岳, 岫嶠山こうろうざん)
- ④「黄山」(こうざん・Huang-Shan, 安徽省の山名, 古く黟山—いざん—)
- ⑤「香山」(こうざん, Xiang-Shan, 北京市西郊の山名, 別名香炉峰)
- ⑥「嶠山」(こうざん・Xiao-shan, 河南省西部の山名, 別名嶽崙山—きんぎんざん—)
- ⑦「貢山」(こうざん, Gong-Shan, 貢山独竜族怒族自治県, GongShan Drungzu Nuzu Zizhixixian, 貢山はこうざん トールンぞくじちけんの略称。雲南省, 古く南詔国の地。のち麗江—れいこう—)
- ⑧「江山」(こうざん, Jiangshan,) 浙江省県名
- ⑨「恒

山」(こうざん・Hengshan, 山西省山名, 別名玄岳, 北岳, ⑩「洪山」(こうざん・Hongshan, 湖北省の大洪山の旧県名) ⑪「永城」(えいじょう・Yongcheng, 河南省県名) ⑫「水城」(すいじょう・Shui-cheng, 貴州省の県名) ⑬「潁上」(すいじょう, 安徽省県名) ⑭「永靖」(えいせい, Yongjing 甘肅省県名) ⑮「永清」(えいせい, Yongqing, 河北省県名) ⑯「栄成」(えいせい, 山東省の県名) ⑰「精河」(せいが, Jing, 新疆維吾爾自治区) ⑱「清河」(せいが, Qinghe, 河北省県名) ⑲「齊河」(せいが, Qihe, 山東省県名) ⑳「青河」(せいが, Qinggil, 新疆維吾爾自治区) ㉑「泰安」(たいあん, Tai'an, 山東省県名) ㉒「秦安」(しんあん, Qin'an 甘肅省県名) ㉓「新安」(しんあん, Xin'an, 河南省県名) ㉔「新安」(しんあん, Xin'an, 江蘇省新沂-しんぎ-県内鎮名) ㉕「新安」(しんあん・Xin'an, 江蘇省北部旧県名) ㉖「杭州」(こうしゅう, Hangzhou, 浙江省市名) ㉗「高州」(こうしゅう・Gaozhou, 広東省県名) ㉘「黄州」(こうしゅう, Huangzhou, 湖北省鎮名) ㉙「広州」(こうしゅう, Guangzhou, 広東省省都) ㉚「膠州湾」(こうしゅうわん, Jiaozhou-Wan, 山東省山東半島) ㉛「広州湾」(こうしゅうわん, Guang-Zhou-Wan, 広東省雷州湛江(たんこう)港の旧称) ㉜「公主嶺」(こうしゅうれい, Gongzhuling, 吉林省鎮名) ㉝「撫州」(ふしゅう, Fuzhou, 江西省市名) ㉞「柳州」(りゅうしゅう, Liuzhou 広西壮族自治区市名) ㉟「郴州」(ちんしゅう, Chenzhou 湖南省県名) ㊱「竜州」(りゅうしゅう, 広西壮族自治区の県名) ㊲「竜首山」(りゅうしゅうざん, Longzhou Shan, 内蒙古自治区内山系名, 別名走廊北山) ㊳「晋寧」(しんねい, Jinning 雲南省県名) ㊴「新寧」(しんねい, Xinning, 湖南省県名) ㊵「普寧」(ふねい, Puning, 広東省県名) ㊶「富寧」(ふねい, Funing, 雲南省の県名) ㊷「阜寧」(ふねい, Funing, 江蘇省の県名) ㊸「姚安」(ようあん, Yao'an 雲南省の県名) ㊹「洮安」(とうあん,

Tao'an, 吉林省の県名) ④⑤「東安」(とうあん, Dong'an, 湖南省の県名) ④⑥「慶雲」(けいいうん, Qingyun, 山東省の県名) ④⑦「慶元」(けいげん, Qingyuan, 浙江省県名) ④⑧「涇源」(けいげん, Qingyuan, 寧夏回族自治区県名) ④⑨「南豊」(なんほう, Nanfeng, 江西省県名) ⑤⑩「南平」(なんぺい, Nanping, 福建省市名) ⑤⑪「南坪」(なんぺい, Nanping, 四川省県名) ⑤⑫「漢陰」(かんいん, Hanyin 陝西省県名) ⑤⑬「漢陽」(かんよう, Hanyang 湖北省県名) ⑤⑭「永豊」(えいほう, Yongfeng 江西省の県名) ⑤⑮「永平」(えいへい, Yongping 雲南省の県名) ⑤⑯「文安」(ぶんあん, Wen'an 河北省県名) ⑤⑰「六安」(ろくあん, Lu'an 安徽省県名) ⑤⑱「新干」(しんかん, Xingan 江西省旧県名) ⑤⑲「新平」(しんへい, Xing-ping, 雲南省旧県名) ⑥⑰「新平彝族傣族自治州県」(しんへいいぞくだいぞくじちけん, Xing-Ping Yizu Daizu Zizhixian 雲南省県名) ⑥⑱「汶川」(ぶんせん, Wenchuan, 四川省県名) ⑥⑲「漢川」(かんせん, Hanchuan, 湖北省県名) ⑥⑳「甘泉」(かんせん, Ganquan, 陝西省県名) ⑥㉑「孟県」(うけん, Yuxian, 山西省県名, のち改め余県とする) ⑥㉒「孟県」(もうけん, Mengxian 河北省県名) ⑥㉓「宣城」(せんじょう, Xuancheng 安徽省県名) ⑥㉔「宜城」(ぎじょう, Yicheng 湖北省県名) ⑥㉕「無極」(ぶきょく, Wuji 河北省県名) ⑥㉖「無棣」(ぶてい, Wudi 山東省県名) ⑥㉗「興義」(こうぎ, Xingyi 貴州省県名) ⑥㉘「孝義」(こうぎ, Xiadyi 山西省県名) ⑥㉙「興文」(こうぶん, Xingwen, 四川省県名) ⑥㉚「平陰」(へいいん, Pingyin 山東省県名) ⑥㉛「平陽」(へいよう, Pingyang 浙江省県名) ⑥㉜「平遙」(へいよう, Pingyao 山西省県名) ⑥㉝「全県」(ぜんけん, Quanxian 広西壮族自治区旧県名, のち全州—Quanzhou—と改める) ⑥㉞「單県」(たんけん, Shanxian 山東省県名) ⑥㉟「金具」(きんけん, Jinxian 遼寧省県名) ⑥㊱「均県」(きんけん, Junxian 湖北省の県名) ⑥㊲「忻県」(きんけん, Xinxian 山西省の県名) ⑥㊳「欽県」(きんけん,

広西壮族自治区旧県名, のち欽州—Qinzhou—) ⑧②「錦県」(きんけん, Jinxian, 遼寧省県名) ⑧③「復県」(ふくけん, Fuxian, 遼寧省県名) ⑧④「夏県」(かけん, Xia xian, 山西省県名) ⑧⑤「花県」(かけん, Hua Xian, 広東省県名, のち市) ⑧⑥「佳県」(かけん, Jia Xian, 陝西省県名) ⑧⑦「華県」(かけん, 陝西省県名) ⑧⑧「咸陽」(かんよう, Xianyang, 陝西省市名) ⑧⑨「簡陽」(かんよう, Jian yang 四川省県名) ⑨⑩「灌陽」(かんよう, Guanyang, 広西壮族自治区県名) ⑨⑪「漢陽」(かんよう, Hanyang, 湖北省県名) ⑨⑫「興化」, Xinghua, 江蘇省の県名) ⑨⑬「光化」(こうか, Guanghua, 湖北省の県名) ⑨⑭「巧家」(こうか, Qiaojia, 雲南省県名) ⑨⑮「江華」(こうか, Jinghua, 湖北省の旧県名, のち江華瑶族自治県, Jianghua Yaozuzizhixian と改める) ⑨⑯「黄驊」(こうか, Huanghua, 河北省県名) ⑨⑰「紅河」(こうか, 紅河哈尼族彝族自治州, Honghe Hanizu Yizu zizhizhou, 雲南省) ⑨⑱「哈佳」(こうか, 哈佳鉄炉, Hajia Tielu, 哈爾浜より佳水斯まで) ⑨⑲「黄果」(こうか, 黄果樹瀑布, Huangguoshu Pubu, 貴州省)

これらの地名のうち中国では「簡体字」を用いることによって、更に間違いやすくなる。その例は次の如し、文中の数字①興山②光山③永城④水城⑤永靖⑥永清⑦精河⑧清河⑨杭州⑩抚州⑪庆伝⑫庆元⑬南丰⑭南平⑮汉阴⑯汉阳⑰永丰⑱永平⑲无极⑳无棣㉑无棣㉒兴文㉓平阴㉔平阳⑳復県⑳夏県㉑咸陽㉒簡陽㉓興化㉔光化などがある。

⑩複合地名について

二つの地名を併合して、一つの地名にすることを複合地名と呼んでいる。地名の簡略化と少し異なっている。既成の地名を一つにして新地名とすることをいう。所謂地理的地名に多い。黄河平原, 淮河平原, 海河平原というように合成語をつくることも含めて複合地名としている。今

日用している安徽省の安徽は安慶と徽州の複合地名という。以下主なものを掲げてみると、武昌・漢口・漢陽が武漢市。武漢三鎮ともいわれた。建安と甌寧で建甌。襄陽と樊城で襄城。蘭陽と儀封で蘭儀。原武と陽武で原陽。蘭儀と考城で蘭考。その時代で複合合成が理解されるが、しかし、時を経ると消失していく地名もある。

複合地名も勿論簡略と縮略の一つの体系と考えてよいが、革命進行中には根拠地の行政について独特の表現をした。省の複合化を企り「鄂豫皖蘇区」とか「晋察冀区」の地名が用いられた。又、「陝甘寧区」もよく用いられた根拠地区の一つであった。経済特別区の中にも「蘇滬」「蘇杭」「黄淮海」「京津塘」が用いられ、自然地理名称には「汾渭平原」「江淮平原」「松遼平原」などの用語が用いられている。鉄道路線は大部分が複合地名を使用している。始発の地名(駅名)と終着地名を路線名としたり、所属地域の名称、包括名称、異称を使用することもある。

起点地名、城市名(別称も含む)の形では、京広(北京-広州)、津浦(天津-浦口)があり、起点所在地の省(直轄市・自治区)の簡称を組合わせたものに「皖贛鐵路」(蕪州-貴溪)や「湘黔鐵路」(株州-貴陽)などがある。又、一省一地域、一区域一地の簡称と組合わせたものもある「蘭新」(蘭州-烏魯木齊)、「隴海」(蘭州-連雲港)などがある。街道名もほぼ同じである。長江の瞿塘峽と巫峽と西陵を併せ「三峡」という。完達山以北の松花江、黒竜江、烏蘇里江の合流する沖積泥炭平原を「三江平原」という。複合地名である。五大連池などもこれに含まれる。複合地名の特有の表現はないが、発音(拼音)をつけてみると少しはその特徴が理解できる。安徽/省 Ānhuī-Shěng, 武漢/市 Wúhàn-Shì, 三/峽 Sān-Xiá, 五大/連池 Wūdà-Liánchí, 三江/平原 Sānjiāng-Píngyuán, 京/漢鐵路 Jīng-Hàn-Tiělù。複合語地名は地名範囲を限定できないので、「黄淮海」Huáng-Huái-Hǎiなのか、「黄淮海地区」Huánghuái hǎi Dìqūなのか「黄淮海地区」Huáng-Huái-Hǎi

Dìqū なのか「黄淮海」Huáng huái hǎi なのか不明確なものもある。実際には「黄淮海」という古くからの海域がある。これは黄海，東海，南海という海洋名と別に扱っている。しかし，海域の厳密な区分はない。

⑪中国地名の反序地名について

反序とは語順が反対になる地名がある。漢文の熟語の順序を変えると，全く別な意味になることは良く知られている。和名では地名順序が固定して，東京以外に京東という地名は用いない。京都の東を京東というかも知れぬが一般的ではない。ところが，中国の地名には江蘇省に「江浦」があつて，浙江省に「浦江」がある。こうした例をいくつか見てみよう。

江浦（江蘇県名），浦江（浙江県名），陽高（山西省県名），高陽（河北省県名），昌樂（山東省県名）樂昌（広東省県名），西林（広西県名），林西（内蒙県名），化隆（青海旧県名），隆化（河北省県名），平南（広西壮族自治区県名），南平（福建省市名），南坪（四川省県名），陽信（三東省県名），信陽（河南省市名県名），政和（福建省市名），和政（甘肅省県名），安福（江西省県名），福安（福建省県名），子長（陝西省県名），長子（山西省県名），寧海（浙江省県名），海寧（浙江省県名），安新（河北省県名），新安（河南省県名，江蘇省鎮名），陽曲（山西省県名），曲陽（河北省県名），南海（広東省県名），海南（青海省県名，省名），都昌（江西省県名），昌都（西藏自治区），桐梓（貴州省県名），梓桐（四川省県名），寧安（黒竜江省県名），安寧（雲南省），平和（福建省県名），和平（広東省県名），仁懷（貴州省県名），懷仁（山西省県名），武城（山東省県名），成武（山東省県名），康保（河北省県名），保康（湖北省県名），德保（広西壮族自治区県名），保德（山西省県名），開封（河西省市名），封開（広東省県名），平原（山東省県名），原平（山西省県名），安慶（安徽省県名），慶安（黒竜江省県名），寧武

(山西省県名), 武寧 (江西省県名), 海竜 (吉林省県名), 竜海 (福建省県名), 陽原 (河北省県名), 原陽 (河南省県名), 豊南 (河北省県名), 南豊 (江西省県名), 平羅 (寧夏回族自治区県名), 羅平 (雲南省), 安西 (甘肅省県名), 西安 (陝西省市名), 化徳 (内モンゴル自治区県名), 徳化 (福建省), 平武 (四川省県名), 武平 (福建省県名), 海興 (河北省県名)。興海 (青海省), 陽山 (広東省県名), 山陽 (陝西省県名), 寧南 (四川省県名), 南寧 (広西壮族自治区省都), 安吉 (浙江省県名), 吉安 (江西省県名), 寧晋 (河北省県名), 晋寧 (雲南省県名), 安遠 (江西省県名), 遠安 (湖北省県名) などがある。

⑫街巷門牌の地名特徴

農村集落はおおむね「点」状地名で, 都市集落は「面状」地名となる。都市の中部には都市機能に区分された集落が形成され, 特殊な街路名が置かれている場合がある。都市の中の市区と地区は面状地名, 街と巷名は線状地名, 街路門牌は点状地名で構成されている。一般にはこの3地名形態が網状になって分布している。時には地下街を構成する都市があるか, 地上街巷路と地下街路が立体的構成をして重複地名がおかれたりする。都市地名は都市の発展段階と過程を表示していることが多い。街巷名の多くは, 廟宇, 衛署, 工区, 貴族邸, 人名, 市場, 地形をふくめた外形特徴, 水道, 橋名, 池塘などの地名を基本とし, 人物物資などの交流交易がさかんになると, 方向指示を表らわす地名が生れる。都市と都市と間の交通路, 都市と農村の交通路, 都市内部交通路などが往来地名となる。街路門牌 (番地) 地名は一般に最初は開拓者の命名, のちに社会的な容認が必要となる。次が符号的呼称特徴が地名となる。街路上 (死胡) などに特別な名がつけられる。一地一名, 一名一地が原則であるか, 建物があって一定範囲を占拠すると, それが地名となる。地名には三特性というのがある。「音」「形」「語義」で決定するといわ

れる。又、地名の排列は面積で決まり、県の範囲の下に郷が決まり、最下層に「屯」が入る。多層排列と呼んでいる。従って北京市西直門45号とか、北京市白石橋20号とか、北京市五棵松50号になる。この門、橋、松を通名とっている。方位など語義を補うのが通名なのである。本当は白石橋は白色の石橋であり、五棵松は五棵の松樹というべき処が通名で省略されている。都市では北京市という専名と通名が組合わさって地名となるのが基本的構造といわれている。都市には宗教殊に道教と関連した地名も少くない。象八仙山、三官廟、老城隍廟、觀河水庫などという例がある。商(殷)代の鬼魂崇拜などで知仙方とか煉仙丹などといった方士名が地名になっている処もある。

北京の街巷の「胡同」は従来蒙古語の井戸($x\cup++\cup K$)から借用したものと解釈されていた。なぜ、漢族が蒙古族の井戸を街路名にしたかが長い間論じられてきた。最近になって「胡同」は漢語であるとの意見が強くなっている。漢語の中古音語の中でも特に晋南方言と関係し、「胡同」は晋南語の「窟衙」で、最初は街口上の門楼のことをいったといわれる。山西运城一帯では門楼を「梢門窟衙」とっている。車門の門楼を「車門窟衙」といい、小巷口の門楼を「大門窟衙」或は「套門窟衙」という。「窟衙」は古く「御衙」と書き、北京の胡同になったといわれる。晋南で胡同というと門房、門楼のことであり、北京その他には街巷に用いている。胡同(門楼)は小巷ともつながっている。大門を開く時、胡同と小巷は「通道」をなし一体のものである。小巷が行き止まりになると胡同として延長する処もあり、地方によっては小巷を胡同とっている。別に胡同は巷門の音変化であるという説もある。これらの事は機会をみて述べてみたい。